

2017年

10月10日

第307号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 Tel 0983-32-2025

生命力を信じる

園長 児嶋草次郎

鶏頭の十四五本もありぬべし

子規

9月15日、西日本新聞におもしろい記事が載っていました。「おもしろい」と言う表現が良いかどうか。もしかしたら共感するというような言い方の方が当たっているのかもしれない。正岡子規の作った上の句について、松王かおりさんという予備校古文科の先生が、読み説いておられるのです。そのことで今年の現代俳句評論賞を受賞されたとか。

「古文」の専門家としての立場から、句の「ありぬべし」を分析し、次のように説明しておられます。

「この句は、眼前に咲く『現在』の庭の鶏頭から、『過去』（とりわけ1年前）の鶏頭を思い起こし、その『過去』を拠点としながら、『未来』、それも自らが不在となった庭の鶏頭に思いを馳せた句だといえるのではないだろうか。」

「『現在に』、『過去』と『未来』の庭を引き寄せた三重構造となっている」とも書いておられます。

私には古文についての、また俳句についての素養はないのですが、子規の心境を想像しているうちに、共鳴する感情が浮き上がって来たのです。

そう言えば、5月に、近所に住む高見乾司さんの案内で来訪された、作家森まゆみさんから自著の「子規の音」という正岡子規評伝をいただき、子規に対して親近感を抱いている所に、この記事を読んだので、よけい興味が湧いたのかもかもしれません。

この「子規の音」の中にも、鶏頭の句を取りあげた所はありました。鶏頭の句だけでも58句も作っていると。

鶏頭の花に涙を濺（そそ）ぎけり

鶏頭や今年の秋もたのもしき

などを紹介した後、「自分の『死』を意識している子規が、赤く群立する鶏頭に

強さ、たくましさ、愚直さを受け取っていた」と倉田紘文という人の説を引用して、「同感だ。」と書いておられました。

子規が晩年の10年を過ごした東京根岸の家には、小さな庭があって、同居する母親と妹があれこれと草花を育て、子規は庭に面する6畳間で結核に触まれた体を横たえながら、その庭を見て楽しんだとか。慶応3年(1867年)生まれの子規はこの地で35歳で亡くなり(1902年)、その後、家は空襲で焼けたが、子規を愛する人々によって、戦後同じように建て直され公開しているとも、「子規の音」には書いてありました。

この子規の庭が現在どうなっているのか。今度東京に行った時のぞいてみたいという欲求も湧いてきて、著者の森まゆみさんに、その後手紙も書きました。著書のお礼を述べた上で、「ケイトウは生命力の非常に強い植物で、1回植えると毎年そのこぼれ種から自ら芽を出し、庭の片隅で再生し続けます。」と偉そうに説明。書いているうちに急に思いついて、この友愛社で毎年咲き続けているケイトウの種を紙に包んで、同封してしまいました。

もし、子規の庭のケイトウが途絶えているのであれば、播いてほしいという願いをこめたわけです。何の反応もなく無視された結果とはなっていますが、ケイトウをめぐるって、イメージをふくらませ充分に楽しめた「子規の音」でした。

さて、今回の友愛通信では「ケイトウ」の話を書かせていただいています。ケイトウについて、お二人の方が書いた文章を紹介させていただきました。おそらくお二人ともケイトウを育てた経験がない、というのが私の直感であり、そう感じたが故に、私の方が子規のケイトウへの思いを正確に理解できているのではないかと考えたわけです。

今年も友愛社の庭のあちこちでケイトウが元気よく林立し、その生命力の旺盛な姿をアピールしています。毎年種も採種していますが、自らも大量に周辺に種を落して、人間の手入れをアテにせず、例年咲き続けてくれます。

この友愛社では、もう30年以上生き続け、穂がどんどん細くなり、おそらく原種にもどっていつている、とは以前にも書きました。

東京根岸の子規の家で、母と妹が庭で野菜の手入れをしながら、

「あら、今年もケイトウが生えて来ているよ」

「生命力の強い花ですね」というような会話を子規は毎年聞いたのでしょうか。

結核で常に死を予感しなければならぬ子規は、どういう思いでその会話を聞いていたのか。来年は自分は今この世にはいないのかもしれない。しかし、この目の前のケイトウは、確実にこの庭で咲き続けているだろう。その生命力にあやかりたいのだけれど、体調は一向に良くならない、そんなことを思っているう

ちに、涙も出てくる。

そんな心境を子規は句にしたのでしょう。自分の命の有限性とケイトウの花の永続的な命との対比がなければ生まれないでしょう。

そして、もしかしたら、この句の「十四五本」の中に、自分の知人・友人達を重ねたのかもしれない。つまり、自分は近々この世から消えていなくなるけど、友人たちが自分の志を引き継いでくれるのではないか。そんな微（かす）かな希望もこめられているのではないか。そんな気にもなつて来ます。斜に構えたニヒリストはそんな気分になれず、子規という人は素直で実直で前向きの感性の人なのだろうとも思えて来ます。

ところで、私も 70 歳が近くなり、時々、立ち止まって、子規ほど差し迫ったものではないけれど、自分がこの地上からいなくなったら、この友愛社内の花々はどうなるのだろうと思うことがあります。ケイトウやメランポジウムやトレニアは自分で生えて来てくれるけど、マリーゴールド、サルビア、ポーチュラカ等は、やはりポットで育ててあげる必要があります。否、そんなレベルの話ではない。この友愛園はだれが荷っていくのか。

友愛園の子供たちが次々に大学に進学するようになって来たことは、そんな私に希望を抱かせることになっています。これから進学する者も含めて 14、5 人くらい志を引き継いでくれる者が出てくれば、友愛園は安泰でしょう。

それを実現するためには、それぞれが個人主義的に勝手気ままに大学で活動するのではなく、和と輪、つまり友愛の精神で互いに励まし合い支え合いながら勉強してほしいと思います。そういう願をこめて、「友愛バンド」と彼らと呼ぶことにしたのです。

そんなことをアレコレ考えている時、9月下旬、「友愛バンド」の一人が医師より長期入院が必要だと告げられました。9月28日、前担当保母と一緒に病院で聞いた病状についての説明は、ショッキングなものでした。

彼女はこの春大学に入学し、はりきって学び、アルバイトも順調にこなしていたのです。体調の異変を訴え8月29日から入院しましたが、なかなか回復せず、医師より呼び出されたのです。私は、ある程度の話を保母より聞いていましたので、彼女が失望しないようにプラス思考になる本と、庭のケイトウやヒガン花を花瓶に入れて持っていきました。

医師は、ある特殊なウイルスに感染しており、がんに準じた治療が必要であると告知し、一緒に聞いていた彼女は涙を流していました。運命として受入れ、病氣と闘っていくしかありません。私は彼女の生命力を信じることにしました。

迷いましたが、ここにその後、彼女あてに書いた手紙を紹介させていただきます

す。友愛園を卒園し、現在指導員をしている杉田竹見君に持って行ってもらい、彼女が手紙を読んでショックを受けた時は、フォローするようにも指示しました。杉田君の報告によると、ちょうど「友愛バンド」の他の2名が見舞いに来ていたとのことでした。

読者の皆様には、手紙から、彼女の背負わされている運命の重さについてお察しいただけたらと思います。そして、彼女がたくましく乗り越えていくであろうことを祈り、期待していただければと願います。

家族・親族に全く期待できない状況の中で入院しており、入院治療費のこと、今後大学への復帰のことを考えると厳しいものがあるかもしれませんが、全力で支援していく覚悟です。支援の和・輪が広がればとも願っています。

H子へ

この前は、お医者さんに、H子の病状を聞いて、私まで泣きたくなった。今までさんざん苦勞して生きて来たH子を、またこうして、天は神はどうしていじめるのだろうと思った。何らかの意味があるのだろうけど、それはなんののだろうと、ずっと考えている。

私が次男を交通事故で亡くして以来かもしれない。一時期は天や神をうらんだけど、そのうち、私に何かを気付かせようとしているのかもしれないと思うようになった。そして、友愛園の子供たちを守るために身代りになってくれたのだ、と思えるようになった。他にも気付かされたことがあるけど、ここでは書かない。

今は次男の人生にはそれなりの価値があったのだと思えるし、天や神にも感謝はしている。プラス思考になるということは、こういうことだと思う。

H子にとってプラス思考になるということは、どういうことなのだろう。この前病院に見舞った時、自然治癒力を高めるために、プラス思考になる本をプレゼントした。「毎日、ありがとうございます。感謝します」と言おうとも書いた。そういう言葉をつぶやく時、何をイメージしているかが問題。

H子には背負わされている重い課題がある。両親との関係、そして一時期だったがお世話になったU氏との関係だ。お姉さんとの関係もあるかもしれない。親子の縁を切られるほど淋しいことはない。何があったのかは、私はほとんど知らない。U氏との関係についてもほとんど知らないに等しい。H子には、触れたくない過去であり、考えることさえ拒否しているようにも見える。

H子は、自分がプラス思考になるということと、自分の家族・親族のこととは別問題だと考えているのではないだろうか。私は別問題ではないと思う。つまり、天や神は、H子に自分の家族のことをキチンと整理させるために、こういう機会

を作られたのではないかと思う。

これは、私の願いである。両親に対するうらみ。つらみは、この際捨てよう。そして、自分がこの世で活躍するために生んでくれたことについては、感謝することにしよう。姉とも色々トラブルはあったのかもしれないけど、今後もし会う機会が出て来たら、素直に「姉としていてくれてありがとう」と言えるようにしよう。そして、U氏に対しても、短い期間ではあったけど、「お世話になりました。施設の生活費の一部を出してくれてありがとうございます」と言えるようになるろう。

このように、一番根本的な部分をプラス思考で整理していくことを、天・神は、今、H子に求めているのだと思う。重いことだが、今H子が抱えている病気くらい大事なことだ。

最初は嘘でもいい。両親に対して「生んでくれて、ありがとうございます。感謝します」と言ってみよう。そのうち気にならずに言えるようになる。

以上が私の思いだ。今、自分の心を整理するチャンスが与えられていると受け取るようにしよう。ここを乗り越えたら幸せな未来が待っている。H子にだけ神は試練を与えているのではない。遅かれ早かれ、それぞれみんな試練が与えられ、それを乗り越えていかねばならない。その試練に気付かない人間も多いけどー。

プラス思考になって、気長に、この病気と付き合っていこう。すぐ結論は出ない。がんばれ。

10月5日

草次郎

友愛の十四五人もありぬべし